

自由の彼方で

椎名麟三

自由の彼方で

椎名麟三



講 談 社

自由の彼方で

著者紹介

明治44年10月1日兵庫生

「近代文學」同人

作品

「深夜の酒宴」「永遠なる序章」

「邂逅」等

昭和29年5月25日 第8刷發行 頁 260

著 者 しい な りん ぞう
 椎 名 麟 三

東京都文京區音羽町3-19

發 行 者 野 間 省 一

東京都千代田區神田錦町3-1

印 刷 者 山 縣 佐 兵 衛

東京都千代田區神田錦町3-1

印 刷 所 大 同 印 刷 株 式 會 社

發行所 東京都文京區 株式 大日本雄辯會講談社
 音羽町3-19 會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。 (大進堂製本)

PRINTED IN JAPAN

目次

自由の彼方で	三
第一部	五
第二部	九
第三部	二五
繋がれた犬	一九
冬の日	三五
あとがき	二七

装 幀 吉 田 健 男

自由の彼方で

第一部

1

僕は、古びた手札型の寫眞を一葉もっている。上半身を正面からうつした數え年十七歳の少年の寫眞だ。頭は五分刈で、額は、後年の特徴をすであらわして、廣く生え上つてゐる。ねずみにそつくりの臆病な眼、だんご鼻、やや大きい口、貧弱な耳。これらが小判型の小さい顔にくつついてゐる。着衣は、白ワイシャツに白ズボン。そのワイシャツの袖は肘のところまでたくしあげられてゐるのだ。

これが山田清作という、僕の少年時代の寫眞である。だが、この寫眞が僕であるということに對しては、嚴肅に拒絶せざるを得ない。僕は、この寫眞にだけではなく、僕の一切の過去の寫眞に對してそうなのである。それらは、いずれも犯罪と死の影をもつてゐるからだ。あの殺人現場に残された死體寫眞に通ずる嫌惡をもつてゐるからだ。たしかにこの少年は、明らかに僕ではない。僕の死體なのである。滑稽な、消え去つてしまつた僕の死體なのだ。

だが、この死體も、この寫眞のとられた一九二七年には、この地上を歩いてゐた。彼は、その前年、ある家庭的な事情から、田舎の母のもとからたずねて行つた大阪の父の家をとび出してゐた。家出後は、そのころの家出少年のたどるコースを、彼も、實に順調にたどつたのである。野宿、天王寺の無料宿泊所、商店の小僧、出前持、コック見習そして不良少年、という具合にである。そして清作が、不良少年と交渉をもちはじめたのは、大阪の中里にあつたレストランのコック場にいた時なのだ。

中里のレストランは、安いという評判をとつてゐた。いわば、西洋料理専門の大衆食堂である。しかしこの安いという評判は、コック場や店の者たちに、重い犠牲を要求した。見習コックであり、四番コックでもあつた清作にとつては、直接に労働時間の長さが身にこたえた。朝の十時から、夜の十二時まで、文字通り息をつぐひまもないのだ。彼は、朝、眼をさますと、すぐじやがいもと玉葱をむきにかかり、それは、一日中つづいた。しかし彼はいささかもその生活に不平をもつてはいなかつた。彼は、他の世界について何も知らなかつたからだ。そして彼は、一日中、暗い狭い倉庫の片隅にただひとり坐つて、ペテナイフで、じやがいもや玉葱をむきつづけてゐた。ときには夢のなかでも、じやがいもをむいた。

だが、他の人々は、そうではなかつた。始終人がかわつてゐたが、はじめて來た者は、地獄

へでも來たように驚いた。それでも最初の二三日は、呆れながらも鼻唄をうたつていた。だが、やがて無口になり、眼には殺氣をおびて來る。ちよつとしたことで、チーフコックは、フライパンをとばし、二番コックは、肉切庖丁を投げつけ、三番コックは、盛附けた皿を空中滑走させ、皿洗いは、荒々しく皿洗いの棒を振上げた。ときには店が立てこんでいるのに、コック場全體が、收拾することの出來ない混亂に陥ることがある。すると店にいるマネージャーがとんで入つて來る。劍道三段、柔道初段の腕を見込まれてマネージャーになつてゐる警官上りの男だ。彼は、コック場入口から、木刀をもつてあらわれ、

「靜にしろ！ 阿呆たれ！」

と怒鳴る。その彼は、威嚴にみちている。いまだに彼は、元居た警察の道場へ遊びに行き、師範の代りをやつたりしてゐて、警察と密接な連絡をもつてゐるからだ。その彼の鼻の下のちよび髭は、全日本の警察權力が、そこへ集中してゐるように、ぴくぴくふるえてゐる。誰も、その髭に抵抗することは出來ない。人々は、陰鬱にだまり込み、それぞれの持場へかえる。マネージャーは、がにまたで、店の方へ去つて行く。彼は、始終、性病にかかつてゐたのだ。

コック場の掃除がすむと、清作の一日が終るのだ。清作は、裏の空地へそつと出る。そこで彼は、誰にも見られてはならない、祕密な行事をあわただしげにすますのだ。彼は、深夜の空の星を見上げる。それから、どうして自分には幸福が來ないんだろう、と聲に出して星へ訴え

る。すると自動的に涙が流れて来るのだ。その彼に、幸福というものが、具體的に要求されていたわけではない。そもそも幸福とは何なのか、ということなど、彼にはさっぱりわかつては
いなかつたのだ。ただ、彼には、その涙が大切であつただけである。涙がながれると、自分が
自分でない一種特別な人間になつた氣がするからだ。だが、その行事は、二三分で終らせなけ
れば、誰かがやつて来るかも知れない。で、彼は、素早く何知らぬ顔で、コック場へ歸つて來
る。彼は、人々へ自分の罪をかくすように云う。

「あしたも、天氣や。」

勿論、天氣のことなんか、清作にとつてどうでもいいことなのだ。

だが、ある夜、清作は、この二三分の行事を妨害された。數日前に來た、内村という三番
コックが出て來たからだ。彼は、コック服を脱いで、汗を拭いていた。四月に入つたばかりだ
が、風通しのわるいコック場は、ストーブの火でむれるのだ。内村の胸は、うすくて、闇のな
かに黄色いバター製品のように見えた。清作は、急いで涙をとめて云つた。

「あしたも、ええ天氣や。」

「ひどいことや。」と内村は、云つた。「お前、こんなところに居るなんて、阿呆や。第一、仕
事なんか覚えられへんやないか。」

「でも、わい、どこへも行くところ、あらへんのや。」

「おれが、いいところへ世話してやら。」

清作はだまつた。彼には、信じられないことだつたからだ。だが、清作より二つ三つ年上にすぎない内村は、清作にとつて突然神に變化していた。この若い神は、急に聲をひくめて云つた。

「おれ、マスターと交渉するからな。給料はええかも知らんけど、その給料の二倍も働かせやがるなんて……そんな阿呆なことあるか。でも、どうせ交渉してもあかんやろ。そしたら、おれ、マスターをやつつけて逃げるからな。お前、そのときコック場から、味の素の大罐かつぱらつて、電車道の方へ逃げろ、いいか。」

それから三日たつた夜だつた。いつもより忙しくて、清作の脳味噌は湯になり、身體は湯にひたしたパンのようになつていた。店には、まだ客がいたが、清作は、コック場の床を洗いはじめていた。内村が、清作を冷蔵庫のかげに呼んだ。

「今晚、マスターのやつ、やつつけてしまおう。」と内村は云つた。

「今晚、マスターのやつ、やつつけてしまおう。」と清作は答えた。

内村は、自分の財産である肉切庖丁を、マスターにくるんだ。清作は、それを見ていた。しかし何の感じも思いうかばなかつた。マスターをやつつけるといふことは、具體的に何を意味するのか、彼には判つていなかったのだ。コック場の他の者たちは、後片附けに忙しげに動き

まわつていた。内村は、店の方へ歩き出した。それで清作もその後から歩き出した。マスターは、レジスターの前で、マネージャーと賣上げの傳票を調べはじめていた。マスターは、背の高いやせた男だつた。和服に太い帯をしめていた。内村は、そのマスターへ近づいて、押問答をはじめた。それは清作の、豫期していなかつた出来事だつた。清作は、びつくりし、心臓が鳴りはじめた。どうしよう、マスターはとにかく、この店の主人なのだ。清作は後ずさりした。するとさらに、豫期しないことが起つた。マネージャーが内村の腕をつかみ、内村が肉切庖丁を振り上げていた。清作は、コック場へとんでかへつた。チーフコックが、ストープに背を凭らせて、飯を食つていた。清作は、棚の上を見た。カレーやケチャップやグリーンピースやマスタードなどの、大きな罐詰や瓶やボール箱が雑然とならんでいた。味の素の大罐もそのなかに、二つ三つあつた。清作は、そのなかの一つを引ずり下して腕にかかえると、あわてて店の横の路地を通つて、表へとび出した。店からは、騒がしい怒聲がきこえていた。清作は、表でしばらく内村を待つた。足が、ぶるぶるふるえていた。どうしよう、と彼は、心に呟きつけていた。その彼は、自分がいま、何をしているのかさえ、さっぱり判らなかつたのである。やがて内村が、店のドアからとび出して來た。彼は、清作の右腕にかかえているものを見ると、叱るような聲で云つた。

「逃げろ！」

清作は、駈け出した。店においてある自分の荷物や、まだ貰っていない今月分の給料が、ちらつと思いうかんだ。あれらは、どうなるんだろう。彼は、電車に乗つてからも、それを考えていた。

内村は、清作を、千日前に近い、オアシスというバアへ連れて行つた。ボックスが四つほどしかない小さな店だつた。二人の女給が、そのボックスのテーブルに向ひ合つて、化粧を直していた。暇な店らしかつた。内村について、コック場へ入つた。玩具のようなコック場だつた。そこに玩具のようなストープが壁に押しつけられていた。そのバアのマスターである渡邊新吉は、コック場につづいている三疊で、二三人の少年と花札をひいていた。小太りのどこかやさしげな感じのする二十二三の男だつた。酒に酔つてゐるらしく、顔が赤かつた。内村は、その新吉へ云つた。

「また、ブタや。」

新吉は、にやつと笑つた。内村は、店の間に引返したので、新吉も店の間へ引返した。内村は、疲れたようにボックスへ腰を下しながら、清作から味の素の罐を受取つた瞬間、内村は、不審げな顔をした。彼は、急いで罐の蓋をあけると、勢よく清作へ投げつけた。

「阿呆たれ！……これ、コンスターチやないか！」

罐は、清作の頭へぶつかつて、床にころげた。内村のやせた蒼白い顔は、一層白くなつてい

た。清作は、痛む頭をなでながら、顔にふりかかつた粉をなめた。罐は、味の素のそれなのに、中身は明らかに味の素ではなかつた。清作は、どうしてこうなつたのか、判断がつかなかつた。内村は、再びののしりながら、清作めがけてとびかかつて來た。彼は、死にものぐるいになつて清作をたたきのめした。それから一口も口をきかずに、ボックスへごろりと横になり、ぐつしよりかいた汗をふいた。清作は、床から身體をおこした。が、立ち上ることが出来なかつた。二人の女給が、笑いながらその清作をながめていた。

その夜、そのオアシスのボックスで寝た。マスターと花札をひいていた少年とも一緒にである。ひとりは清作より二つ年下の『ひとで』で、ひとりは『役者』と呼ばれていた。『ひとで』は、かつばらいの名人だつた。こましやくれていて、絶えず落着なく動きまわつていた。『役者』は、のつぱりした顔の少年で、清作と同年だつた。彼は、龜つり専門だつた。清作は、その夜また、この店のバーテンダーにも會つた。彼の名は『せんべい』だつた。しやくれ上つた平つたい顔をしていて、横から見ると、三日月のようだつた。彼は、陰氣で、無口な少年であつた。『ひとで』と『役者』は『せんべい』を敬遠していた。その二人の態度のなかには、『せんべい』に對する輕蔑と同時に恐怖が感じられた。

翌日、清作は、新吉の世話で、大洋軒というカフェーで働くことになった。オアシスから、二通りを二つ隔てたところにある店だった。そこでの生活は、中里でのそれとは雲泥の差があった。夕方の四時にストープに火を入れるまでは、殆んど自分の自由な時間をもつことが出来たのである。それに彼は、いまやひとりではなかった。仲間がいた。ただ残念なことには、清作は彼等から金をもつて行かれるだけの仲間にすぎなかったのである。しかし中里のレストランの件で刑事が内村の居場所を尋ねに來たとき、清作は内村たちのほんとの仲間であることを實證した。清作は、内村の住所を知つていながらあくまで知らないと言いつたのである。

清作の、その大洋軒での生活は、彼にとつて新鮮な経験だった。姫路に近い農村にいる母のことすら思い出す餘裕がないほど、その世界は彼の心をとらえていた。その彼は、山奥から、いきなり豪華な百貨店につれて來られた少年に似ていた。その豪華なものの最大は、女であつた。しかも彼は、その七人の女たちと同じ二階の、女給部屋に寝起きしていたのである。彼女たちのもつてゐる種々な、奇妙な品物や美しい衣裳や彼らの會話や客との情事やさまざまな理解の出来ない、彼女らの涙や怒りやそして女の美しい肉體などが、彼を驚かせた。夜、清作は、

眼をさましていることが多かつた。女たちのいろんな姿態が見られたからである。女たちは、ブローズをはいていなかったのだ。ときには眠れない女がいた。清作は、その女の洩らす溜息のなかに、彼のまだ知らない愛の重さと、苦惱のもつ不思議な愉悅とを知つた。そして一ヵ月たないうちに、清作は、自分が男であるという意識に目覺めると同時に、ひとりの女に愛を感じたのである。その女は、まことに當然ながら、客たちからこの店のナンバーワンと稱せられてゐる美代子という女であつた。

清作は、早稻田大學の講義録をとつて、その勉強のために自分の時間をつかつた。美代子のためにである。しかし當の美代子は、そんなことは知らなかつた。清作は、店のピアノへ向つて「枯れすすき」をひけるようになりたい、と努力した。勿論、美代子のためにである。そしてそれも、美代子の知ることの出来ないことであつた。一人前のコックになりたいと、眞面目に働いた。それも美代子のためであつた。だが、美代子は、彼のそんなひとり芝居に氣のつく道理はなかつた。彼は、愛の表白の仕方を知らなかつたのだ。

夜、清作は、美代子の寢ている方を眺める。白い腕が蒲團から外へ投げ出されている。彼は、奇妙な感じがする。それは肉慾的なものではなく、親しくなりたいという感情である。風呂から上つた全裸の彼女を見る。特別料理につかう眞白な食皿のように白くかたくしまつてゐる。美しいと思う。そしてそれだけなのだ。だが當人は、美しいと思つたことで、現實に彼女